

有機廃液処理に対する希望

農業生物研究所 鈴木 綱

多量の溶剤系有機廃液が廊下に積まれると、熱帯夜の続く盛夏には心配である。年2回の廃液処理を待ちかねる程、私どもの研究室のようにたった2人の実験でも多量の廃液が貯まるので、多人数の教室での廃液保存の苦心がよく判る。環境管理センター報、第6号の利用者の要望に提言されていたように廃液の貯留庫の設置に賛成である。実験に一定のパターンがないので、春秋の年2回の廃液処理では、この機会を逸すると、半年以上廊下に積まれたままになる。したがって、少なくとも年間の廃液処理回数を増して欲しいものである。

また可燃性でない有機廃液のエマルジョン燃焼法では、廃液が灯油で数倍に増量され、廃液数10ℓの処理に1日近くかかるので、短時間で処理できる方法が開発されることを願っている。

また環境管理センターから遠隔地にある私どもには、センターへの廃液の運搬が難題の1つである。公用車で運搬してもらう際、事務部の都合の返事を待っている間に、センターから与えられた2～3日の指定の日が無くなり、3者(センター、事務部、研究室)の都合の良い日が揃うのは難かしいものである。私が1人で処理する様になると、センターの先生に労力の提供を願う破目になる。津島キャンパスのある教室の教官が学生3～4人と一緒にリヤカーに廃液ポリタンクを満載してセンターまで運び、廃液処理を行っている情景に幾度か接したし、また廃液処理を女子学生2名一組の2時間交代で行うなど(環境管理センター報、第4号の利用者の声)は、若い人手のある教室でこそできることである。遠隔地で、公用車の運転資格者がいない少人数の研究室では、廃液の運搬処理に困る。業者委託で運搬し、気軽に廃液処理ができることを希っている。